

早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）第六十九号 二二一三頁、二〇二二年三月

## 「狐変姐己」随記

堀 誠

### \*縁起

二〇一八年十月三十日に武漢大学で開催された国際学術シンポジウム「日本文学の中の中国のイメージ」に参加する機会を頂戴した。その折に発表した「日本文学における「姐己」の血流」の論考を収めた「日文学研究」第二号（特集日本文学と中国、二〇二〇年九月、武漢大学日本研究センター、鼎書房発売）が、新型コロナウイルス感染流行の厳しい環境の中で企画・編集・校正の作業を経て刊行に漕ぎつけたことは大慶の極みである。その校了直前に、シンポジウムにご一緒した千葉俊二先生の新著『谷崎潤一郎 性慾と文学』（二〇二〇年八月、集英社「集英社新書」）をご恵投いただいた。心から感謝するとともに、魅惑的なタイトルに惹かれつつページを繰ると、第二章「〈永久機関〉の発明―『刺青』の基底にあるもの」には、拙文でも触

れたところの「姐己のお百」について「ことに講釈師の初代桃川如燕が大幅に虚構をまじえて語ったものが人気を博し、よく知られるようになった。」と指摘した上で、

姐己は、古代中国の殷の紂王の妃で、その悪逆非道、淫逸放縦な所行によって殷の国を亡ぼすに至った、いわゆる傾国の美女である。お百が美しい容色をもちながら、淫楽にふけて、暴虐をなしたところからこの異名がつけられたわけだが、如燕はこんな風に語りは始めている。

と端的に紹介して如燕の講談の語り出しをも引用する。かつ谷崎の「統悪魔」（原題は「悪魔（統編）」、「中央公論」第二十八年第一号、大正二（一九一三）年一月）に「佐竹騒動姐己のお百」「高橋お伝」という「講釈本」が登場し、同じく「饒太郎」（「中央公論」、第二十九年第十号、秋期大附録号、大正三（一九一四）年九月）にも「姐己のお百」だの「高橋おでん」だのという「講談本」を読むことが描か

れることを記す。時間的制約からこうした指摘を拙文に吸収反映できなかったことを悔やむ一方、その刺激の中に芽生えた新たな思考をまじえて些か「狐変姐己」の話譚に関連して考察を試みたい。

### ＊ ＊ 「姐妃のお百」と「姐妃の小万」

コロナ禍の外出自粛の環境にあつて、恩恵を蒙ること多大なのはオンラインで閲覧可能なデジタル・アーカイブの存在である。日中を通じて魔性の存在として名高い「姐己」は、九尾狐の変じた妖婦として人口に膾炙するが、その日本的な受容の最たるものとも考えられる「姐妃のお百」の言説に関しては、奥武則『スキヤンダルの明治―国民を創るためのレッスン』（一九七七年一月、筑摩書房「ちくま新書」）第二章２の「姐妃のお百の「再デビュー」」には、「お百は幕末期には稀代の毒婦として語られるようになっていた（「姐妃」の形容が最初に付けられたのは、講談らしい。）」と括弧内に講談の果たした役割に言及する。その「講談」の資料となる初代桃川如燕（一八三二―一八九八）口演の『姐妃のお百前編』が幸いにも国立国会図書館デジタルコレクションで公開される。その講談の「第一席」の冒頭を引用してみる。

エー毒婦お百の伝、後に此の者を姐妃のお百と云ふ、ドウ云ふ訳で姐妃のお百と云ふかと申しまするに、出生が大坂で、江戸で悪事を働らき、婦人で佐渡の国へ流罪<sup>なぐさ</sup>れ、佐渡を脱出<sup>ぬけ</sup>で、佐竹の愛

妾百合と云ふ名前になりまして、遂に佐竹に於て御処刑に相成りました、彼の天竺にて華陽夫人と云ひ、唐土にて姐妃と云ひ、日本にては玉藻前と名前が三度変わりましたほどの悪狐に等しき婦人だと云ふので、姐妃のお百の名がご置きます、先づ近くは高橋お伝、原田お絹、嶙お由などと云ふ毒婦もございましたが、お百は毒婦中の毒婦でございます、右のお百の出生から言上いたします、

この『姐妃のお百前編』には、「明治丁酉（三十年、一八九七）の元旦」の日付による「松声堂主人識」の「姐妃のお百前編序」が付される。その年記は、如燕が逝去する前年に当たること重要であり、その口演はまた最晩年のものに基づくものと想像される。同デジタルコレクションには、同じく桃川如燕口演の『秋田騒動姐妃のお百』（長篇講談）第六十八編、大正十年（一九二一）五月、博文館）も収蔵されるが、こちらには前口上は無く、講談の口舌も平易な口語に変わっている。この「桃川如燕口演」は、あるいは二代目桃川如燕（一八九八年襲名、一八六六―一九二九）の講談であるのか。それはそれとして、『姐妃のお百前編』の「序」は、

人あり人間一世の快樂は何物なりと問へハ余輩は変化多きにありと答へん

「変化多き」を人生の快樂とする自説を開陳し、「豊太閤」を挙げて「人生快樂の極」と例示すると、

事の大小固より異れりと雖も本編の主人公お百の如く一生中変化

多き婦人は又あらざるなり彼れ其容貌の美なるハ心の邪惡を隠し或時は令嬢と変じ或時は海賊と化し死したかと思へば活き活きたかと思へば死したる如く其變化の神妙なる人をして胆を寒からしむお百一世の浮沈夫れ斯の如し

と、お百の「変化多き」婦人の存在をアピールしては、

左れば本編の如き如燕口を開けば波瀾を生じ口を閉づれば頓挫となり抑揚起伏千変万化の妙味はお百一世の比にあらず

と、お百の身の変転浮沈に比肩するに足る如燕の話術の変幻自在な妙手を喧伝する。

すべて「変化」の妙に特化した絶妙な序であるが、翻って如燕の前口上に耳を傾ければ、「姫妃のお百」の身の変転と、三国に名を変えた「悪狐」の魔性を掛けたところに「姫妃のお百」の命名があることを説いている。

『姫妃のお百前編』の序の年記から九年を経た明治三十九（一九〇六）年四月刊の「ホトトギス」第九巻第七号「附録」に掲載された夏目漱石「坊っちゃん」の「七」には、「清」に送った手紙の返信を待ちに待つ「おれ」が、「然し今時の女子は、昔と違ふて油断が出来んけれ、御氣を御付けたがええぞなもし」という下宿の「お婆さん」と、身持ちの「不慥か」な「マドンナ」の話題に話し及ぶ。

「厄介だね。渾名の付いてる女にや昔から碌なもの居ませんからね。さうかも知れませんか」

「ほん当にさうぢやなもし。鬼神のお松ぢやの、姫妃のお百ぢや

のてて怖い女が居りましたなもし」

「渾名の付いてる女」に対する「おれ」の価値観はもとより、「お婆さん」の口を突いて出る「鬼神のお松」や「姫己のお百」は、「坊っちゃん」が刊行された日露戦争後の世相にあつて、有名を馳せた毒婦でもあつた。よもや「マドンナ」が人を魅惑する魔性の「姫妃のお百」と同列に論じられようとは思ひもよらなかったが、この呼称に認められる「姫妃」は、古く中国は殷の紂王の寵妃として知られた姫己を指すに他ならず、姫己と紂王との並はずれた淫樂のさまは、『史記』『殷本紀』に「長夜の飲」、「以酒為池（酒を以て池と為す）」、「縣肉為林（肉を縣けて林と為す）」といった語によつて象徴される一方、その放縱・暴虐の果てに、太公望呂尚を軍師とする周の武王によつて誅伐される。ただ「殷本紀」等の記載に姫己が后妃に封じられたといった記事認めない。<sup>(2)</sup>「姫妃」の表記は、紂王による寵幸の事実によつて姫己の「己」字に女偏を加えたものと理解される。ただ漢字音は「妃」字と「己」字では異なるものの、日本では「姫妃」の二字を「ダッキ」の読みで理解したものらしい。

この「姫妃」の表記は、滝沢馬琴の『燕石雜志』（文化七（一八一〇）年刊）巻一「恠刀欄」に付帶する「九尾」の考説や、文政二（一八一九）年刊の葛飾北斎「北斎漫画」第十編の「孫悟空」と並んだ「殷の姫妃」の画図にも認められ、後者は「ダッキ」のルビを伴っている。そして悪逆無道・残忍無比の毒婦として勇名をはせた「姫妃のお百」にも用いられるが、その「姫妃の」の綽名には、先蹤となる次の事例も認め

られる。

文政八（一八二五）年九月初演の『盟三五大切』<sup>（3）</sup>は、鶴屋南北七十一歳の作（世話狂言）として知られる。その筋立ては、寛政七（一七九五年）年一月に江戸の都座で初演されて大当たりを取った並木五瓶『五大力恋絨』に『仮名手本忠臣蔵』と『東海道四谷怪談』を織り込む。美貌の深川芸者である小万は、「芸者姐妃の小万実ハ神谷召使いお六」と配役され、その亭主は船頭の三五郎。そもそも勘当の身の上の三五郎は、塩冶家に縁のあった父が旧主のために金子百両を必要としていることを知り、これを用立てて勘当を解いてもらおうと思ひ、その金子のため女房お六を「小万」と名乗らせて芸者にする。美貌の小万は三五郎が連れて来た薩摩源五兵衛という浪人の気を引いて金を巻き上げるが、作中には「姐妃の小万」の呼称に加えて、狐変の「姐妃」ゆかりの「狐」に関わる語も巧みに台詞に饅められる。

滝沢馬琴は先の『燕石雜志』巻一「恠刀欄」に付帯する「九尾」の中で、

九尾の狐といへば姐妃玉藻が事なり、と儂子も合点せり。

というまでに、「玉藻の前」の話譚がその時代に「三国伝来の怪談」として一大ブレイクしたことに言及する。その虚実に童禪ならずとも歓喜するほどに話譚が生長し流布浸透した結果、「姐妃」の名を冠した毒婦「姐妃の小万」の呼称さえ生まれたといえる。

ただ、「姐妃のお百」が実在した人物であったのに対して、その先蹤となる「姐妃の小万」は劇作中の美婦で深川芸者である。この男を

手玉にとってしたたかな「姐妃の小万」の存在は、『盟三五大切』の流行によって喧伝され、「姐妃の」の呼称も跳梁跋扈したと推測される。懸案の「お百」もまた深川の芸者置屋を買い取り、自らも「小三」の名で芸者に出て、秋田藩の佐竹騒動に絡んでいく。その「姐妃のお百」の呼称は、南北の劇作における「姐妃の小万」の名声に由来した、美貌の容姿と深川の地縁を結んだ二番煎じともいえる模擬的な命名に負ったものでなかったか。「姐妃の小万」と「姐妃のお百」という二妖を思うとき、「姐妃の」をめぐる一つの言説の誕生の舞台裏も鮮やかに垣間見えるようである。

### \*\*\*『三国悪狐伝』の書名

再び如燕の口演に翻れば、毒婦「姐妃のお百」は三国に名を変えて出現した稀代の「悪狐」に等しい存在であると由来を語るが、その「彼の天竺にて華陽夫人と云ひ、唐土にて姐妃と云ひ、日本にては玉藻前」という三国伝来の話譚には、そこに東周の幽王に寵愛された褒姒がその玉藻の前の前身の系譜に欠くべからざる存在であった。その褒姒が話譚から姿を消すのは、近世にあつて岡田玉山の読本『画本玉藻譚』に始原するものと推察される。そこには震旦の姐己を冒頭に据えて、天竺の華陽夫人、日本の玉藻の前の順に話譚が展開するのであり、如燕という天竺、唐土、日本の、いわゆる三国伝来物の典型的な話型とはいささか順序が異なる。ともかく『画本玉藻譚』の刊行は、

姐己、華陽夫人、褒姒、玉藻の前の四つの話譚で構成される高井蘭山の読本『三国妖婦伝』の後塵を拝したが、実はその二年前の「寛政丁巳のとし（九年、一七九七）」には成っていたと玉山は序文に書いている。そして、これらの読本に先んじて成っていたと考えられるのが、後述する『三国悪狐伝』ないし『悪狐三国伝』の書題をもつ実録的写本である。

滝沢馬琴は『昔語質屋庫』（文化七（一八一〇）年刊）の「九尾の狐の裘」でも、先の『燕石雜志』の考説を引き合いに出しながら暢達に自説を開陳し、さらに『玄同放言』（文政元（三（一八一八）一八二〇）年刊）「宋陳彭年綽号」に重ねて論説を試み、その末尾に「抑く九尾狐の事、前板燕石雜志にいひしは、疎漏なり」云々と自ら述べた考説の中に、『三国悪狐伝』の書名が挙げられる。

又国俗（みくにじよといはゆる）の所云九尾狐は、三国悪狐伝一名三国妖婦伝（さうし）てふ、草子物語より出たり。彼悪狐伝は、原本何人の作なるをしらず、ちかき比（おこなは）まで、写本にて行れき。

わが国における「九尾狐」は、『三国悪狐伝』なる草子物語に出現したと断じているが、その草子物語は、いわゆる実録的写本と称されるもので、貸本を通して広く読まれ、物語的に広範に流通したことも知られる。ただ馬琴が記す『三国悪狐伝』の書名で行われるものは、書誌的に現在知られるものは後藤丹治旧蔵本・拙蔵本・千葉俊二蔵本の三指を屈するのみで、大多数が「三国」と「悪狐」が逆転した『悪狐三国伝』の書題で行われる事実を確認する必要がある。<sup>4</sup>馬琴が読み

得たテキストがたまたま『三国悪狐伝』なる変種の書題であったにすぎず、その草子物語はむしろ『悪狐三国伝』の書題で一大ブレイクしたのが実情ではなかったかとも考えられる。

しかしながら、馬琴の言説は一つの権威のごとく意味を付与され、その『三国悪狐伝』の呼称は書物を介して流通するのあまり、实体は『悪狐三国伝』なれど、対外的には『三国悪狐伝』の書題をもつて呼称する空気が生まれたのではないか。文政十二年（一八二九）刊の『本朝悪狐伝』前編の自序に岳亭丘山が、

近頃或禪僧または是を編述して三国悪狐伝といふ書を著せり。

と記す「三国悪狐伝」の書名も、馬琴が『玄同放言』にいう「三国悪狐伝」に口裏を合わせたもので無かったかと思われる。

こうした書名に関わる事情を考えるに、興味深い一つの事例を拾うことができる。架蔵本の中には、「悪狐」を「妖狐」に変題した『三国妖狐伝』なる写本二冊十五巻がある。<sup>5</sup>この写本には封面がなく、いわゆる内題部分には「三国妖狐伝」と墨書した題簽風の紙が天地を糊づけした形を残して今日に伝わる。したがって、題簽風の紙を横からめくると、その下には紛れもなく本来題されていた「悪狐三国伝」の文字が見事に確認される。おそらくは、『悪狐三国伝』が流布し、同一書題の本書が少なからず流通する環境の中で、その物語に鮮味を喚起すべく、『三国悪狐伝』まがいにして、それとは一字違いの『三国妖狐伝』なる変名を試みたかと推測される。まさに奇を衒った変題といえることができる。



加えて、架蔵本にはもう一つの変種と称すべきテキストがある。その書題は『悪狐三国伝』とは二字違いの『九尾三国伝』<sup>(6)</sup>とある。内容的にはこれまで述べてきた『三国悪狐伝』ないし『悪狐三国伝』の実録的写本と同様のものでありながら、写本ではなく「版本」のテキストであることが重要である。

書題の「九尾」の語は、馬琴が『燕石雜志』卷一「恠刀襦」に付帯する「九尾」で、「今按ずるに、九尾の狐は瑞獸也。」と書いて「呂氏春秋」「白虎通」を引用したが、その奇瑞たる九尾狐の属性のベクトルを反対方向に転じて魔性の化生に変転したところに大きな意味がある。明の『金瓶梅詞話』第二十九回・第七十五回には「九条尾狐狸精」「九条尾的狐狸精」の用例があり、後者では呉月娘が李嬌児らに潘金蓮のことを「他是那九条尾的狐狸精。（あの人は例の九尾の狐なのよ。）」とこの語で罵っている。そこに中国通俗小説の「狐変姐」の話譚を踏まえた「九尾狐」の新たな魔性としての語義を見ることができる。

こうした狐の属性にも関わる語義の変異は、「文」<sup>あや</sup>の世界に生じた画期的な醍醐味でもある。もちろん『悪狐三国伝』や『三国悪狐伝』の書名に冠される「悪狐」は、魔性の妖婦の正体を象徴する意味をもつが、その「悪狐」を「九尾」に変えたというべき書題は、先に記した『三国妖狐伝』の書題の場合と同様に、その実録的写本が流布流通する中で積極的に一つの変化を求めた好事的な行為とも理解される。こうした事例を勘案すると、『三国悪狐伝』なる呼称自体について

も、本来『悪狐三国伝』が流布流行する中で鮮味を求める変化球的な変名によったものではなかったかとさえ考えられる。この草子物語を扱った山下論文（注4所掲）が「悪狐三国伝」をタイトルに据えるのは、版本調査の実態に即した至当な判断であったとも考えられる。山下論文に先んじて考察を展開した当時、後藤論文（注4所掲）に確認される『三国悪狐伝』テキストこそが、馬琴が『玄同放言』に記した『三国悪狐伝』の書名と一致することから、まさに「馬琴以前の古書」として普遍的な書名であるとの先入観が強く働いていたことも事実としてある。また、馬琴が「ちかき比まで、写本にて行れき。」<sup>おこなは</sup>と記していたのによれば、馬琴の頃には「写本」ならざるもの、すなわち「版本」も存在し、馬琴が読んだのも版本であったのだろうか。極めて数の少ない『三国悪狐伝』のテキストに関わって、テキストをめぐるさまざまな疑問も生じてくる。

### \*\*\*版本と序文の典拠

ところで、この『九尾三国伝』が「版本」であるという書誌的な特異性に加えて、もう一つ興味深いのはこのテキストに付された次の序文である。

詩曰、……………序〔A〕

非為由来是禍基、惟因一点念頭錯、  
詎料終身自喫虧、姦淫賊盜方纔起、

徒流斬相隨、抛屍露骨身難保、

帶鎖披枷悔是遲、縱令逃而得官刑過、

神明の報応す不差池、及蚤は回心猶可救、

一天万上タリト雖、君心不正身不保而国亡、

紂幽者ことし可言自得自滅哉、絶歎息………序〔B〕

### 山陰幽居

この序文に年記は無く、末尾に「山陰幽居」と記すのみである。この序文について言えることは、山下論文が夙に、「今回実見し得た諸本のうち四本に序文が付され、そのうちの二本には、「于時寛政九年巳孟秋旦／山野辺周卜撰之」及び「于時寛政第十年午初春旦／山野辺周卜撰之」という年記と署名が記される。」と指摘した『悪狐三国伝』の序文と重なる部分を有することである。その〔A〕・〔B〕・〔C〕に分段して示された序の〔A〕の全文および〔B〕の冒頭「如紂幽者可言自得自滅哉。」の部分と文字的におよそ合致することが明らかである。しかも、この『九尾三国伝』の序文の後半は部分的に訓点や書き下し文的な表記が混在する一方、〔B〕の後半および〔C〕の部分は略して、最後に「絶歎息」の三字を置いてまとめていることが分かる。

特に序文冒頭の「詩曰」は、どこまでが詩であるのか気になるところでもある。詩句となれば、当然のことに詩型の観点からも捉えることになるが、この詩句においては偶数句末の押韻は不成立であり、また七言詩とすれば、字句の不足する句もある。山下論文の序文の字句と対照しつつ調べ得たのは、この「詩曰」から「及蚤は回心猶可救、」

の部分、実は明の洪武帝が洪武三十一年（一三九八）年に発した「六論」の解説である『六論衍義』の第六条「母作非為（非為を作す母れ）」の文の末尾に掲出する「詩曰」と重なる事実である。その判明した詩句を示せば、押韻の不成立についても容易に理解される。

詩曰（詩に曰く）

我勸<sup>ム</sup>世人<sup>ニ</sup>「莫<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>為<sup>スルコト</sup>」（我 世人に勸む 非為すること莫れ）

非為由來是禍基（非為 由來 是れ禍基）

只因<sup>ル</sup>「一点念頭錯<sup>ニ</sup>」（只だ一点念頭の錯に因る）

詎料終<sup>ル</sup>身自喫虧<sup>セントハ</sup>（詎んぞ料らん身を終ふるまで自ら喫虧せんとは）

とは）

姦淫賊盜方纔起<sup>ニ</sup>（姦淫 賊盜 方に纔に起れば）

徒流絞斬即相隨<sup>フ</sup>（徒流 絞斬 即ち相隨ふ）

抛<sup>チ</sup>屍露<sup>ハシテ</sup>骨身難<sup>ク</sup>保<sup>ル</sup>（屍を抛ち骨を露はして身保ち難し）

帶<sup>シ</sup>鎖披<sup>キテ</sup>枷悔<sup>ハルモ</sup>是遲<sup>シ</sup>（鎖を帶し枷を披て悔るも是れ遅し）

縱然<sup>トシテ</sup>逃<sup>タリ</sup>得<sup>トモ</sup>官刑<sup>ヲ</sup>過<sup>グトモ</sup>（縱然として官刑を逃れ得て過ぐとも）

神明報<sup>ハ</sup>応<sup>ヘ</sup>不<sup>セ</sup>差池<sup>ハ</sup>（神明の報応 差池せず）

及<sup>テ</sup>蚤<sup>ハ</sup>回<sup>ラサリ</sup>心猶可<sup>ク</sup>救<sup>フ</sup>（蚤きに及びて心を回らさば猶は救ふ可し）

我勸<sup>ム</sup>世人<sup>ニ</sup>「莫<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>為<sup>スルコト</sup>」（我 世人に勸む 非為すること莫れ）

『六論衍義』は、明末清初の人で、村学究の范鉉が平易に「六論」を説明した書であり、康熙二十二年（一六八三）に琉球の程順則が福州に留学してこの書物の存在を知り、同四十七年（一七〇八）に再び

渡清した際に自費出版して持ち帰った。享保四年（一七一九）三月に薩摩藩主島津吉貴が徳川幕府に献じ、將軍徳川吉宗が室鳩巢に和解させ、荻生徂徠に訓訳本の作成を命じるにいたった。徂徠の訓訳は享保六年に『官刻六論衍義』として印行され、鳩巢の『六論衍義大意』は享保七年に刊行されたことが知られる。<sup>(7)</sup> 引用は『官刻六論衍義』の訓点に従い、括弧内に書き下し文を付したものである。<sup>(8)</sup>

この「母作非為」の詩篇七言十二句（六韻）の冒頭第一句と最終第十二句の共通する二句を切除して、十句の形態に仕立て直していたことが明白である。その結果、本来の韻字は奇数句末に移動してしまい、本来なされるべき偶数句末の押韻は失われた状態を呈して、文意が理解しにくいものに変じていることが明白である。

この『六義衍義』の詩句との対照により、翻って『九尾三国伝』の字句の欠落や異同についても明らかに、山下論文に引用する序文についても、「A」と「B」の分段に関しては第十句の句末後に移動するのが順当と考えられる。

庶民教育を重んじた第八代將軍吉宗は、享保五年（一七二〇）には寺子屋への支援を行い、『六論衍義』ならびに『六論衍義大意』を官刻しては、後者を寺子屋に配布するとともに、本書を下賜された手習師匠もあつた。この『六論衍義大意』は享保の刊行を起点として、その後、寛政年間（一七八九～一八〇一）、天保年間（一八三一～一八四五）にも重ねて印行されて流行する。<sup>(9)</sup>

六論第六条「母作非為」ならびに詩句に出る「非為」の二字は、悪

行をいう。まさに三国伝来の悪狐が玉体を犯して陰陽道の法力で正体を暴露され、那須野の殺生石に化した後に仏僧によって退治られるのであり、この話譚こそが悪行の航跡を記すものにほかならない。その序文にあつては、まさにこの「非為」にまつわる詩篇を借りて、悪狐の罪業を譴責懲罰するのである。そこに意図されるのは勸善懲惡にほかなるまい。

先に修正を提案した序「A」の末尾の二句「雖為一天万上君、不心正身国亡」および「B」の部分では、三国伝来の話譚を略述し、「C」には宇治の唐の老僧に由来する「三国伝幼書」に基づく『悪狐三国伝』の成書にまつわる記載が展開する。<sup>(10)</sup> その黄檗宗の僧は、先に示した『本朝悪狐伝』序にいう禅僧との関わりも予測される。かつ「三国伝幼書」は不詳であるが、内容的に言えば三国伝来の狐変妖婦の話譚を意味するものであることが予測される。とりわけ「幼」字がくせ者である。「幼」字が日本漢字音で同音の「妖」であれば、三国伝来、あるいは三国にまつわる狐妖を伝える書といった意味にもなる。「幼」が訛字である可能性を含めて、不明なことが少なくない記載である。もとより懸案の『悪狐三国伝』二本の序文に記されるという「寛延九年」「寛延十年」の年記は、そこに詩句が引かれる『六論衍義』ならびに『六論衍義大意』の享保年間の成立とはおよそ八十年を隔てる。むしろその序文に詩篇が引かれたのは寛延年間のころの『六論衍義』関係書の二次的な印行と脈絡をもったものか、その序文のいわれにまた興味こそられる。特にその年記が『画本玉藻譚』の序に記す「寛



政丁巳のとし」とおよそ符節を合するが、とき点には、作為を含めて注意を要する。ともかくは『悪狐三国伝』あるいは『九尾三国伝』の序文に引載される「詩曰」の詩篇に関してその典拠を示しておく。

### \*\*\*贅語

「狐変姐己」の話譚に関する落ち穂拾いといえる話題にすぎないが、些末ながらにまた一定の実があれば、拾い甲斐があったというものがある。「随記」と題する所以である。

注① 「鬼神のお松」は、石川五右衛門、自来也と並んで日本の三大盗賊に数えられる女盗賊である。

② 「姐己」の呼称に関しては、『史記素隠』に「国語」を引いて「有蘇氏女。姐字己姓也。（有蘇氏の女なり、姐は字、己は姓なり。）」と注する。

③ 鶴屋南北「盟三五大切」は、近くは二〇一八年八月九日～二十七日に歌舞伎座「八月納涼歌舞伎」第三部で上演されている。源五兵衛は松本幸四郎、芸者小万は中村七之助、三五郎は中村獅童が演じている。

④ 後藤丹治旧蔵本『三国悪狐伝』は、後藤丹治「三国妖婦伝について」（『説林』第三卷第一号、一九五一年三月）に記載された五冊五巻であり、拙蔵本は「文化九年（一八一二）春二月」の序（本文冒頭第一条を分断加工したものである）を有する三冊十五巻であり、千葉俊二蔵本は節略本一冊である。後藤論文に、「この三国悪狐伝は稀観書のやうで、」と記すように、この書題で行われるものの数は少ない。堀誠「『三国悪狐伝』と玉藻前説話の変容」（『和漢比較文学叢書』第七巻「近世文学

と漢文学」、一九八八年六月、汲古書院刊）の執筆時に依拠したのは、この後藤旧蔵本の記載以外には、三本の『悪狐三国伝』であった。山下琢巳「実録的写本『三国悪狐伝』の成立について」（『読本研究』第四輯上套、一九九〇年六月）には、この三本を含めた十二本の『悪狐三国伝』を著録する。近くは馮超鴻「実録的写本『三国悪狐伝』の伝本について」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』第二十七号二、二〇二〇年三月）には、前掲堀論文の改稿時（『日中比較文学叢考』、二〇一五年九月、研文出版刊）に使用した新蔵本『三国悪狐伝』等の資料を含む附表「調査した二十六本『三国悪狐伝』の伝本の書誌的情報」が付される。その二十六本でも、『三国悪狐伝』『三国妖婦伝』『九尾三国伝』の書題の数を除けば、すべて『悪狐三国伝』である。

⑤ 馮論文（注4所掲）の附表に「堀B本」と記されるテキストである。

⑥ 馮論文（注4所掲）の附表に「千葉D本」と記されるテキストであるが、堀蔵蔵本である。

⑦ 「六論」は、「孝順父母」「尊敬長上」「和睦郷里」「教訓子孫」「各安生理」「母作非為」の六条から成る。『六論衍義』『六論衍義大意』については、東恩納寛惇『六論衍義伝』（『東恩納寛惇全集』第八巻、一九八〇年八月、琉球新報社編）、中村忠行「儒者の姿勢―『六論衍義』をめぐる徂徠・鳩巢の対立―」（『天理学報』第二十三巻第五号、一九七二年三月）、角田多加雄「六論衍義大意前史―六論衍義の成立と、その日本伝来について―」（『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要…社会学心理学教育学』第二十四号、一九八四年）、同「六論衍義大意」についての教育思想的考察」（『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要…社会学心理学教育学』第二十九号、一九八九年）、許婷婷「徳川日本における『六論』道徳言説の変容と展開―『六論衍義』と『六論衍義大意』の比較を中心に―」（『東京大学大学院教育学研究科紀要』第四十七巻、二〇〇八年三月）といった論考を参照した。

⑧ 琉球大学図書館「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブス」の「官刻六論衍義」（阪巻・宝玲文庫、ハワイ大学蔵）による。また「六

論大意』は、『日本思想大系』第五十九卷「近世町人思想」（中村幸彦校注、一九七五年十一月、岩波書店刊）に「参考」として「享保七年八月のいわゆる洛陽版 大本一冊」（東京都立中央図書館蔵の中村久四郎旧蔵本）を底本とするテキストが載る。

（9） 許論文（注7所掲）「2享保期以後の『六論衍義大意』関係書の出版と使用」の指摘による。論文末尾に「『六論衍義』関係書出版年月表」が付される。

（10） 山下論文（注4所掲）より序〔B〕（段落修正）および〔C〕を引用しておく。〔B〕雖為一天万上君。不心正身国亡。如紂幽者可言自得自滅哉。如斑足者早回許故得成治国。日唐天者欲拒根。惟太公望雖是藏猶魂殘。計倭朝來為王位犯。然神明涼々魔退。佛為教道終得佛果。再不教得出也。〔C〕日唐天朝三国来言事。全不有虚説。其美証之一卷。予先祖城州宇治黄壁<sup>マキ</sup>唐老僧在故伝来。則三国伝幼書有題号。然共至古文字不分明故。今度予為見明写説。新拵全部十五卷之書。則惡狐三国伝名号。若見説等乞求者是免而己<sup>マキ</sup>。』